

学会からのメッセージ

「旅ゆかば～自然との共生～」

筆者の個人的な経験から話を始めたい。父の2、3年に一度の転勤に伴い、北は秋田市から南は熊本市で暮らした。転校は方言や習慣に慣れるまでの大変さがあったが、学校での遠足や家族旅行を通して、子供なりに各地域特有の文化、伝統に触れ、食、また自然を享受した。大学時代は福岡市で過ごした。

私が勤める九州大学では、福岡市と糸島市にまたがる広大な伊都キャンパスへの移転が大詰めを迎えている。伊都キャンパスに移るまで、福岡市内で30年近く過ごしていたにもかかわらず糸島市の魅力を知ることがなく、また片道30kmの自動車通勤も辛くなり、糸島市に終の棲家を構えることにした。糸島半島は玄界灘に突きだしており、南は脊振山系の山々が連なる。糸島半島は歴史が深く、史書「魏志倭人伝」に伊都国が記されている。キャンパスの土地造成で出土した貨幣、土器から紀元前後から大陸との交流拠点であったとされる。平原遺跡からは日本最大の銅鏡が発掘され、国宝に指定されている。また、糸島半島は、農林水産業が盛んな地である。天然真鯛の水揚げ量は日本一、米、牛・豚、きゅうり等の生産量は福岡県下でトップクラスである。脊振山の里山では蛍が乱舞し、兎の親子が飛び跳ねている。福岡都心から車で約35分の地に大自然が残されている。私

が過ごした地の中で、これまでに歴史と自然に恵まれたところはない。

しかし、移り住んで5年も経つと、気になる点が目についてくる。玄界灘の美しい海岸では、漂着ごみが目に留まる。糸島富士とも呼ばれる可也山も、山に分け入れば、森が荒廃している。糸島平野の田園地帯は、夜になると煌々とした明かりを放つビニールハウスが点在している。電照菊の栽培である。洋らん、バラ、イチゴの栽培も盛んで、温室栽培の暖房のために大量の重油が用いられ、投入エネルギー過多の農業が営まれていることを実感させられる。

旅行先の歴史、文化、自然、食を大いに楽しむとともに、意識しないと見えてこない地域が抱えている環境・エネルギー問題の現状、保全のための地域の取り組みにも関心を持つことによって、一層、意味深い旅行になると思う。

日頃、訪れる旅先の自然の多くには人間の手が付けられ、生態系(エコシステム)のどこかが欠損してしまっている。放置しておけば、自然の劣化は進行する。自然との共生とは、自然への環境負荷を軽減する行動とエコシステムを維持させるための人間の自然への不断の働きかけであると考える。

(一社) 廃棄物資源循環学会 会長 島岡 隆行